

未来に向かって伸びる鶴嶺の子 鶴小だよい1月号



未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だよい1月号

「学力・学習状況調査」の結果について

令和7年度の学力・学習状況調査は、令和7年4月17日（木）に行われました。今回は、その結果について書きたいと思います。その前に、少しだけ「学力」について、お話ししましょう。

学力と言った時に、皆さんはどんな力を思い浮かべるでしょうか。多分それは、学生だった頃、自分に求められた力をイメージするのではないかと思います。広い範囲の世代で、テストでよい点を取れることは=学力が高いと考えいらっしゃるのではないでしょうか。しかし、必要とされる「学力」は時代と共に変化していきます。

だから、学習指導要領（10年後、20年後の世界がどうなっていて、そこで生き抜いていくために、力を発揮するためにはどういう「学力」が必要かを考え、それに基づいて教育課程を編成する際の基準を示したもの）は、10年毎に改訂を重ねてきています。親世代が考える「学力」との違いをまず認識すること、次に人生の成功モデルも変わっていることを同時に理解する必要があります。親がよかれと思って子どもにすることが、ずれてしまうことにもなるからです。

では、改めて今求められている「学力」を確認しましょう。学習指導要領では、資質・能力という形で示されています。①知識及び技能（実際の社会や生活で生きて働く）②思考力、判断力、表現力等（未知の状況にも対応できる）③学びに向かう力、人間性等（学んだことを人生や社会に生かそうとする）の3つです。このすべてをペーパーテストで見ることはできません。非認知の力も含まれるからです。学力・学習状況調査では、①と②の力について調査しています。①と②の力についても、その力のすべてを捉えられる訳ではありませんが、この調査の問題は工夫され、年を追う毎に良問が多くなっている印象をもっています。

前置きが長くなりました。調査結果について報告していきますね。結果は、国語・算数・理科とともに、全国平均、神奈川平均の正答率を上回りました。それでは、教科毎にみていきましょう。

《教科に関する調査より》

○国語では、「話すこと・聞くこと」（思考力・判断力・表現力等）の内容にあたる〈目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり、関係づけたりして、伝え合う内容を検討することができる〉〈目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように、書き表し方を工夫することができる〉の設問について、全国・県

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和8年1月13日発行



平均正答率よりも大幅に高い正答率でした。

その一方、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」（知識・技能）の内容にあたる〈漢字を文の中で正しく使うことができる〉〈時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくことができる〉については、全国・県平均よりもやや低い正答率でした。

→ 国語の研究を続けた成果なのでしょう。国・県の正答率を下回る設問は、ほとんどありませんでしたし、下回った設問もその差は僅かです。その設問は、知識・技能の部分であったので、考えさせることを今まで通り続けながらスキル学習の時間も併せて充実させます。

○算数では、「図形」の領域（知識及び技能）の内容にあたる〈コンパスを用いて、平行四辺形を作図できる〉や「データの活用」の領域（知識及び技能）の内容にあたる〈簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができる〉の問い合わせ等で、力を発揮することができました。

しかし、「数と計算」の領域（知識・技能）の内容〈数直線上で1めもりに着目し、分数を単位分数のいくつ分として捉えることができる〉の問い合わせでは、低い正答率となりました。

→ 知識・技能は内容をおぼえているということにとどまらず、その知識等が概念化されつつでも使える状態となることが求められています。その部分での課題だと捉えました。質的な高まりを狙えるよう「子どもの言葉」で表現されることにさらに注力していきます。

○理科については、顕微鏡の扱い（知識・技能）についての設問の正答率が若干低かっただけで、他の設問では、すべて高くなりました。

《質問紙調査より》

はじめに、「自分にはよいところがあると思いますか」の問い合わせに、55.8%の児童があてはまる回答し、93%の児童が肯定的回答をしています。昨年度より10ポイント以上上がりました。「あてはまる」の回答がとても高くなつたことが本当にうれしいです。

次に、「学校に行くのは楽しいと思いますか」の問い合わせに、54%の児童があてはまると言えています。これは昨年より8ポイント高い値です。肯定的回答は86%を超えます。

最後に、「友だちとの話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、新たな考え方につづいたりすることはできますか」では、93.6%の児童が肯定的回答をしています。大切にしてきた部分が、きちんと数値として表れてきています。